

# 祭ばやし

作 橘 左京

野上徹は妻の由紀子と娘の春香の三人で都市部にある住宅団地に住んでいる。この町に暮らし始めて丸八年が経った。野上の実家は農家で、自宅から車で一時間ほど走った中山間地域にある。実家では兄の健二が後を継いで米作りをしている。田植えと稲刈りの時期になると、徹は実家に帰って農作業を手伝う。農作業の報酬は自家米と自家野菜だ。実家に戻ると徹は子供の頃に遊んだ故郷の情景を思い浮かべる。

家の前に広がる田んぼの絨毯、緑や黄色の中に点在する農村集落、背後に見える山並み。

春の緑色、夏の青色、秋の黄金色、冬の白と黒。

春は青葉の匂い、夏は草いきれ、秋は稲わらの匂い、冬は鼻を刺す冷たい空気の匂い。

ド、ド、ド ダ、ダ、ダ 春はたんぼを耕す耕運機の音。

ジィ、ジィ、ジィ 夏は蝉の声。

ザク、ザク、ザク 秋は鎌で稲穂を刈り取る音。

ヒュー、ヒュー、ヒュー 冬は家の周りを素通る北風の音。

徹が子供の頃の故郷には四季折々の色と匂いと音があった。しかし、徹の遊び場だった山野を除けば当時を伝える面影は残っていない。

徹が子供の頃の農作業はまだ機械化されていなかった。田植えと稲刈りの時期になると、農家は猫の手も借りたくなるほどに忙しくなる。農家にとって子供は頼りになる貴重な労働力だった。徹も小学校の高学年になると、中学生の健二と一緒に家の周りに広がる田んぼに出掛けて親の手伝いをした。

田植えは五月下旬から始まる。旧暦の皐月は田植えをする月の意味だ。徹と健二は学校から帰ると家の裏手にある苗代田に向かう。苗代田では祖父母が空になったビニール製の肥料袋に籾殻を詰めて作った腰掛に座って、程よく伸びた苗を両手で素早く抜き取っている。抜き取った数十本の苗を手際よく根元で揃えて稲わらで結束する。二人はその苗の束を集め麻袋に入れる。苗の入った麻袋をリヤカーに積んで、近くの田んぼで田植えをして

いる両親のもとに届ける。田んぼに着くとリヤカーから麻袋を降ろして、代わりに空になった麻袋を持って苗代田に戻る。苗代田に帰ると、祖父母が結束した苗の束が入った麻袋をリヤカーに載せて田んぼに運ぶ。田んぼで田植えをしている両親は二人が運んだ麻袋から苗の束を取り出して、腰に巻いた苗籠に補充する。両親は膝や腰を曲げた低い姿勢を取りながら、苗籠から取り出した苗の束から手際よく七、八本抜き取って、筒状の田植え定規で引かれた升目の交点に素早く苗を差し込んでいく。一人が五、六列を受け持ち、五十メートルほどある畦と畦の間を、上体を折り曲げながらぬかるみに足を取られながら苗を植えていく。時々、上体を起こしては硬くなった腰や背中の筋肉を伸ばす。徹と健二も苗を運ぶ合間を縫って田植えを手伝うが、親のスピードにはかなわない。農家にとって田植えは重労働だった。

九月下旬になると稲刈りが始まる。徹と健二は学校から帰ると自転車に乗って田んぼに向かう。田んぼでは両親や祖父母が鎌で黄金色に実った稲を刈り取っている。身を屈めた低い姿勢をとりながら鎌で手際よく稲を刈り取り、上体を起こして刈り取った数株の稲を稲わらで結束する。この時、硬くなった腰や背中の筋肉を伸ばす。二人は稲の束を一輪車で運んで稲架木（はさぎ）に掛ける手伝いをする。稲架木に掛けられた稲穂は夕日を受けて金屏風のような輝きを放っていた。

クウ、クウ、クウ、クウ

近くの刈田では越冬のためにシベリアから渡って来た白鳥が群れをなして餌をついばんでいる。太陽が地平線に没すると辺りが薄暗くなった

クエ、クエ、クエ、クエ

上空を見上げると、ねぐらに帰る一群の白鳥が見える。人間たちもそろそろ家路につく時間だ。秋の日暮れは早い。農家にとって稲刈りも田植えと同じように重労働だった。

農村社会（共同社会）で行われる神社の祭礼は農事と密接に関わっている。夏祭りは厳しい夏季の農作業による労働の疲れを癒す意味合いがある。また秋祭りは収穫の秋を祝い、遠い祖先の頃から一番身近な生活空間にある氏神に感謝する神祭りだ。このように神社の祭礼は神と人々とのつながりを強めることによって農村社会の絆を強化する役目を果たしてきた。

一方、子供にとっては神社の祭りは別の意味での大きな関心事であった。祭りが始まる

と神社の境内には飲食やゲームなどのたぐさんの露店が並ぶ。さほど広くはない境内の参道沿いに「たこ焼き」、「ポツポ焼き」、「かき氷」などの飲食物や「金魚すくい」、「射的」、「ヨヨーつり」などのゲームと、いろいろな屋台が所狭しと並ぶ。祭り好きの徹は、二十代の頃、秋祭りになると兄の健二と神輿を担いだ。

しかし経済成長に伴い農村社会から工業社会へと社会構造が大きく変容していくなかで、地方にいる若者が職を求めて故郷を離れ都会へと流れていった。このため、祭りのクライマックスとも言える神輿の担ぎ手や山車を引く若者が地元からいなくなり、夏祭りや秋祭りが廃止された地域も多い。徹の実家のある集落でも秋祭りが絶えて久しい。

徹が暮らすこの町では毎年八月二十四日と二十五日の二日間の日程で夏祭りが行われる。夏祭りというのは近くにある菅原神社の例大祭のことだ。菅原神社の例大祭は祭祀圏にある町内会にとつては氏子として参加する大事な祭礼であり、町内会の年中行事の中で最も力を入れている催事でもある。この町に移り住んで初めて、徹は祭典委員になった。今年の夏祭りは平日開催のため、会社の夏季休暇を利用して参加することにした。有名な観光地では誘客を考えて、夏祭りの開催日を週末の土日に変更したところもあるが、徹の住んでいる町の夏祭りは菅原神社の例大祭の期日に固定されている。例大祭になると、普段は神社に鎮座する御神体（氏神）が御神輿に移されて、その御神輿が下界（町中）を巡幸する。二十四日の宵宮には御神体を御神輿に移す「宮出」が行われ、二十五日の本宮には巡幸を終えた御神輿から御神体を神社に戻す「宮入」が行われる。

御神輿が下界を巡幸する経路上には、昼間は町内会の山車が御神輿に随行して練り歩き、夜になると各町内会が制作した自慢の絵灯籠が練り歩き、御神輿の露払いを務める。この時、若い男衆、女衆、子供たちが担ぐ灯籠が御神輿の巡幸先に先回りして、ぶつかったり押し合ったりする。灯籠のぶつかり合いは神さまがお帰りなるのを遅らせるためとか、また神さまが灯籠をぶつけ合う若者の勇壮な姿を好むためとも言われている。各町内会から参加する灯籠の側面には工夫を凝らして制作された絵柄が張り付けられる。この絵柄のことを灯籠絵（とうろうえ）と呼んでいる。夏祭りの時期になると新しい灯籠絵の制作とこれまで制作した灯籠絵が御神輿の巡幸する道路沿いに展示される。徹の町内会が制作する男衆が担ぐ灯籠絵は代々、武者を描いたものが多い。

徹に割り当てられた祭典委員の仕事は、二十四日夜の宵宮祭と二十五日夜の宮入に参加

する女衆が担ぐ灯籠の飲み物を運搬する係だ。缶ビールやソフトドリンクを積んだ台車を引いて灯籠に随行する。徹は祭典委員としての仕事が入っていない昼間は家族で祭りを楽しむことにした。

例大祭の時期になると、町内会から「仁和加（にわか）」という山車が参加して町内を巡行する。この山車に乗って太鼓、篠笛、鉦などのお囃子を演奏するのが地元の小中学生だ。

小学四年生の春香も今年から仁和加（山車）に乗って太鼓を叩く囃子方になった。例大祭が始まる十日程前から、囃子方を務める小学生が町内の公園に集まって練習を始める。今日はその初日だ。練習は午後六時から始まる。

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドンドン

ドンガ、ドン

太鼓の練習が始まることを告げる触れ太鼓の音だ。

あら、もうこんな時間だわ。春香、もうすぐ太鼓の練習が始まるわよ」

由紀子がテレビを見ている春香に声を掛ける。

「あ、そうだった。お父さん、一緒に来て」

春香が会社から帰宅したばかりの徹を誘った。

「行ってきます」

徹と春香は町内の公園に出掛けた。

二人が公園に着くと十数人ほどの小学生が集まっていた。春香の同級生の池上雄太君もいる。

「今晚は、雄太君。今日から練習が始まるわね。がんばろうね」

「春香ちゃん、今晚は。僕は小さい頃からお祭りを見ているから、ばっちりだよ」

二人は挨拶を交わした。

公園の一角にある物置小屋から出された仁和加（山車）がブルーシートに包まれた状態で置かれていた。練習初日とあって子供たちの親たちも公園に集まっていた。公園には祭り用のテントが張られ、電線に沿って赤、黄、青、緑、橙の五色の提灯がそれぞれ二個ずつ順番に吊り下げられていた。

「お晩でございます。春香ちゃんも今年から囃子方ですか？」

野上の家の向かいに住む藤田さんが徹に声を掛けた。

「藤田先生、お晩になりました。春香も四年生になって今年から太鼓を叩けるようになりました」

藤田さんは小学校の元教員だ。二十年ほど前に春香が通う小学校の校長を最後に退職した。八十過ぎの藤田さんは老いてなおかくしゃくとしている。藤田さんは現在、奥さんと二人でこの町で暮らしている。藤田さんには三人の子供がいるが、三人の子供たちも小学生の時に「仁和加（にわか）」の囃子方を務めたそうだ。毎年、夏祭りの時期になると隣町に嫁いだ娘さんが二人の孫を連れて実家に戻り、祭りに参加している。

「これから太鼓の練習を始めますので、こっちに集まってください」

子供会の役員をしている井上さんが子供たちに号令を掛けた。

「今日から二十二日まで太鼓の練習をします。今年から練習に参加することになりました  
野上春香さんと池上雄太君です」

子供たちの視線が井上さんの横に並んだ二人に向けられた。二人は、はにかみながらお辞儀をした。

井上さんは話を続けた。

「野上さんと池上君は初めての練習なので、最初はあそこに敷いてある木の板を叩いて太鼓の叩き方を覚えてください」

「はい」二人は元気な声で返事をした。

練習会場には和太鼓と樽太鼓がそれぞれ二台ずつ、それと足の付いた板が用意されていた。この板は広さが半畳ほどある板で下駄のように両脇に足が付いている。地面から板までの距離は十センチほどある。バチで板を叩くと樽を叩いたような音がする。新人の春香と雄太君はこの板を使って練習し、樽太鼓の叩き方を覚えることになった。

ピーシャラ ピーシャラ

ドドンガ、ドン ドドンガ、ドン

トコトン トコトン

チンチン、カンカン

篠笛の音に導かれて和太鼓と樽太鼓の音が続く。最後に鉦の音が太鼓のリズムを整える。

辺りが暗くなってきた。電線に沿って吊るされた五色の提灯が灯されて、薄暮の公園が明るくなった。

「元気がないぞ。もっと大きく叩いて！」

井上さんが子供たちに声を掛けた。井上さんの声を受けて子供たちの練習に熱が入る。徹の時計の針は午後七時を指した。

ピー 井上さんがホイッスルを鳴らした。

「時間になりました。練習はここまで。みんな、こっちに集まってください」

井上さんが子供たちに号令を掛ける。

「今日の練習はこれで終わりにします。練習は今日から一週間あるので休まないで参加してください。それでは後片付けをして帰ります」

練習を終えた子供たちは、各自、自分が使った道具を物置小屋に戻した。初めて練習に参加した春香と雄太君は練習に使った板を、数人の子供たちと一緒にテントの中に入れた。後片付けを終えた子供たちに向かって井上さんは、

「これは子供会で作ったミニ灯籠です。白い紙に好きな絵を描いて灯籠に張り付けてください。出来上がった灯籠はお祭りが終わるまで玄関前に吊してください」と、言って子供たちに灯籠を配った。

井上さんから渡されたミニ灯籠を持って春香がベンチで待っていた徹のところに戻った。

「お疲れさま。春香、初めての練習で疲れただろう」

「そうそう、へとへとよ。おとうさん、これ持って」

春香から受け取ったミニ灯籠は三辺が三十センチ程の長さに組まれた立体型の木の枠だ。灯籠の側面の枠には紙を貼り付けた痕跡があった。この灯籠にはどんな絵が貼ってあったのだろうか。徹は持ち帰ったミニ灯籠に春香が描いた家族三人の似顔絵と家内安全、無病息災の文字を入れて通りに面した車庫の入口に飾った。

ミニ灯籠を持った子供たちが親たちと三々五々に家路についた。公園の周りはずっかり暗闇に包まれている。

「春香、みんな家に帰って行くよ。春香も家に帰って、お父さんと花火を上げようか」

「まだここに居たいの」

「どうして」

「提灯が見たいの」

「練習が終わったから、もうすぐ提灯は消えるよ」

間もなく提灯の灯りが消えて、公園も真つ暗になった。

「春香、早く家に帰らないとお化けが出るぞ」

「お化け怖いよ。お父さん、早く帰ろうよ」

「春香は弱虫だな」

徹は春香の手を取って街灯で照らされた足元を気にしながら家路についた。家に帰った徹は蠟燭に火をつけて玄関前の床に置いた。袋から線香花火を二本取り出して一本を春香に渡した。春香は手にした線香花火を蠟燭の火に近付けた。火の付いた線香花火からブツ、ブツと弾けるような音が流れた。花火の先に小さな赤い玉が現れ、パチ、パチと音を立てながら四方八方に火花を飛ばし始めた。

「わー。きれい」春香が声を上げた。

火花の飛び散る範囲が徐々に狭まってきた。火花の勢いが衰え、小さくなった火の玉が縮んで、プシューと音を立てながらコンクリートの床に落ちていった。

「今日はこれでおしまい。また明日しようね」

「うん」

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドンドン

ドンガ、ドン

太鼓の練習が始まって二日目。徹はベンチに座って春香の練習を見守った。お盆が過ぎた頃から朝晩の空気がひんやりとしている。少しずつ秋の気配が感じられるようになった。今夜は満月の夜だ。月明かりに照らされた地面の上で子供たちの影が動く。

トコトン、トコトン

太鼓から少し離れた場所で、春香と雄太君は先輩たちのバチさばきを見ながら慣れない手つきで木の板を叩いている。

ピー

練習の終わりを告げるホイッスルが鳴った。

「はい。今日の練習はこれで終わりにします。だんだんと上手に叩けるようになりました。

この調子で頑張ってください。太鼓はゆっくり叩くと大きな音が出ます。六年生の木村君

と鈴木君は今年が最後の太鼓になるので、しっかりと練習をして本番に備えて下さい」

指導役の井上さんの講評を聞いた後、子供たちは後片付けを始めた。後片付けを終えた春香がベンチで待つ徹のもとに戻った。

「春香、家に帰ろうか」

「うん」

突然、春香が立ち止まって夜空を見上げた。

「お父さん、まんまるいお月さまが出ているよ」

見上げると雲間から顔を出した満月が見える。

「春香、見てごらん。ウサギが餅つきをしているよ」

「えー。ほんとに？」

月齢がほぼ十五日なので新月から約十五日が経つと満月になる。満月の夜は十五夜。もう一か月もすれば中秋の名月が見られる。徹は思わず口ずさんだ。

「うさぎ うさぎ なに見てはねる」

「春香も一緒に歌う」

「うさぎ うさぎ なに見てはねる 十五夜お月さま 見てはねる」

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドンドン

ドンガ、ドン

太鼓の練習が始まって今日で三日目。徹はいつものようにベンチに腰を掛けて春香の練習を見守った。

りーん、りーん、りーん

暗くなった公園の草むらから秋の虫たちが奏でる音が聞こえる。昼間はジー、ジーと蟬の鳴く声が騒々しく家の中に侵入してくるが、夜になると柔らかな虫の音が周囲の家々に浸透してくる。

ドドンガ、ドン ドドンガ、ドン

和太鼓の練習をしている二人の男の子のバチさばきが滑らかなになった。二台の太鼓のリ



ズムがそろって来たようだ。

トコトン、トコトン

トコトン、トコトン

樽太鼓から少し離れた場所で、春香と雄太君は先輩たちと一緒に木の板を叩いて練習している。樽太鼓のリズムと少しずれているようだ。

ピーシヤラ、ピーシヤラ

ピーシヤラ、ピーシヤラ

太鼓のそばで篠笛を演奏しているのは二人。一人は実行委員の中村さんで、もう一人はお孫さんで中学二年の剛志君だ。

チンチン、カンカン

チンチン、カンカン

太鼓の練習を見守りながら鉦を叩いているのは井上さんだ。井上さんの娘さんで中学一年の香織さんと交代で鉦を叩いている。

井上さんの話では篠笛や鉦の演奏は元々中学生が担当していたが、成り手の中学生が見つからなくて困っているという。

ピー

井上さんがホイッスルを鳴らした。

「はい、今日の練習はこれで終わりにします。笛や鉦の音とだんだんと合うようになってきました。この調子で頑張ってください」

子供たちは井上さんの講評を聞いた後、後片付けを始めた。徹は後片付けを終えた春香と家路についた。

りーん、りーん、りーん

りーん、りーん、りーん

家に帰る道すがら秋の虫たちの声が耳に入ってくる。

「お父さん、虫が鳴いているよ。もしかして鈴虫?」

「そうだね。鈴虫の声だね」

徹は思わず童謡「虫の声」を口ずさんだ。

「あれ松虫が 鳴いている ちんちろ ちんちろ ちんちろりん…」

「私、その歌、知っているよ」

「春香、一緒に歌おうか。最初からね」

「あれ松虫が 鳴いている ちんちろ ちんちろ ちんちろりん あれ鈴虫も 鳴き出した りん、りん、りん、りん りいーん、りいーん 秋の夜長を 鳴き通す ああおもしろい 虫のこえ」

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドンドン

ドドンガ、ドン

太鼓の練習が始まって四日目。日中は蒸し暑い空気に包まれていたが、先ほど降った夕立が打ち水となって、公園に涼風が吹き込んだ。

「今晚は」

「今晚は」

徹と春香が公園に着くと二人の先客がいた。小学低学年らしき女の子とその母親がベンチに座っている。

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

「お兄ちゃん、太鼓を叩くのが上手になったわね。聡美も四年生になったら太鼓を叩けるわよ」

母親が娘の方に顔を向けて言った。

「どうしようかな。わかんない」

女の子は戸惑った様子で答える。

突然、女の子は立ち上がって近くにある鉄棒に向かった。女の子は梯子を横にしたような鉄棒に捕まって、足を宙に浮かべながら手長猿のように両手を器用に使って、梯子の端から端へと渡り歩いた。

この公園には遊具が二つ設置してある。梯子のような鉄棒とシーソーである。シーソーは夏祭りの期間中取り外される。シーソーが設置されている場所に山車を仮置きするためだ。徹は春香とこの公園に遊びに来ることがあるが、子供の姿を見ることはあまりない。春香の好きな遊具が揃っている隣の町内会の公園に行くこともある。この公園には滑り台とブランコが設置されている。それに砂場もある。サッカーなどボール遊びができるスペ

―スもあるが、この公園でも遊んでいる子供の姿を目にすることは少ない。

ピー

ホイッスルが鳴った。

「はい、今日の練習これで終わりにします。笛や鉦との連携がうまくできるようになりました。明日も休まずに参加してください」

井上さんの講評を聞いた後、子供たちはいつものように後片付けを始めた。

「博、こつちよ」

隣のベンチに女の子と座っていた母親が、後片付けを終えた子供たちに声を掛けた。

青色のTシャツを着た男の子が母親の待つベンチにやって来た。

「お母さん、見に来ていたの」

「そうよ。お兄ちゃんが太鼓を叩くのを見たいって、聡美が言うもんだから、一緒に来たのよ。博が太鼓を叩けるのも今年が最後ね。気合が入っていたわよ」

「もちろんだよ。今年が最後だからね。僕は来年、中学生になるから太鼓は卒業だけど、

聡美は来年、四年生になるから、僕の代りに太鼓を叩けばいいよ」

「どうする？聡美」母親が娘に聞いた。

「分かんない」娘が答えた。

三人は提灯が消えて暗くなった公園を後にした。徹も春香と家路についた。

「ただいま」

春香が玄関を開けて由紀子に帰宅を告げる。

「お帰りなさい」

台所に居る由紀子が答えた。

「お母さん、冷たいものが食べたいわ。何かある？」

「西瓜でも食べる？冷えているわよ。あなたもどうぞ」

由紀子が皿に盛った西瓜をエアコンの効いた居間に持ってきた。皿に盛られた角切りの西瓜をフォークで刺して食べる。

ザクザク、ザクザク

西瓜の冷たい果肉と果汁が徹と春香の体を冷ました。西瓜は夏を代表する果物だ。農家で育った徹が子供の頃から覚えている夏の味だ。徹は西瓜を食べながら子供の頃を思い出した。当時の農家にはまだ冷蔵庫は普及していなくて、畑から採ってきた西瓜は丸ごと井戸水や家の前を流れる冷たい小川に入れて冷やしておいた。夕飯を食べた後、冷たくなっ

た西瓜を外から持ってきて家族みんなで扇風機が回る広間で食べた。徹が子供の頃の家には祖父母、両親、兄弟三人の三世代七人が同居していた。ランニングシャツ姿の子供たちは八等分にくし切りにされた西瓜を両手で持って食べ始める。それを食べ終わると、今度はお盆に盛られ両親や祖父母が食べているいちよう切りの西瓜に手を伸ばす。

すると「こら、まだ食べるところが残っているぞ。もったきれいに食べる」と父親によく叱られた。子供たちが食べ終えた西瓜の皮には紅い果肉がまだ残っているが、その部分は甘さが足りないので子供たちは食べずに残してしまう。父親の叱責は丹精を込めて作った野菜を粗末に扱うなどという農家のメッセージが込められていたのだ。徹は角切りされた西瓜をフォークを使って食べながら、ガツガツと食べた子供の頃と比べて、なんと上品な食べ方だろうと思った。

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドンドン

ドンガ、ドン

太鼓の練習が始まって六日目。からつとした秋の夜風が公園を通り抜ける。

「今晚は」

「今晚は」

公園には先着の見学者がいた。五、六歳くらいの女の子と父親だ。父親はベンチに腰を掛けて太鼓の練習を見ていた。

一方、女の子の方は地面に落ちていた小石を拾い集めては一か所に積み上げている。

「パパ、おっきい石を見つけてきたよ」

女の子は両手で抱えて持って来た大きな石を父親に自慢気に見せた。

「本当だ。おっきいね。腫、健一兄ちゃんが太鼓を叩いているよ。見てごらん」

父親が夢中で小石を積み上げている娘に向かって言った。

ケンイチ？

徹は「ケンイチ」という名前を聞いて、太鼓を叩いている男の子に視線を向けた。

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

五、六年生くらいの徹の子が真剣な面持ちで太鼓と向き合っている。

徹は小石を積み上げている女子に視線を戻した。小石を集めては積み上げる女の子の姿を見ながら、徹は「賽の河原」の話を連想した。賽の河原は此岸と彼岸の境界を流れる三途川の河原だ。幼い子供が親より先に現世を去ると、親を悲しませるだけでなく親孝行の功德も積んでいないことから、子供は三途川を渡れず賽の河原で石の塔婆作りをしなければならぬ。塔婆が完成する頃になると、鬼が現れて積み上げた石を崩す。ガラ、ガラと音を立てながら崩れる塔婆。子供たちの石積みと鬼のいじめが永遠に続く。やがて地藏菩薩が現れてこの苦行から子供を救うという仏教説話だ。

徹には五歳年上の健一という長兄がいた。健一は長兄ということもあって、田んぼ仕事で忙しい両親に代わって徹や健二の面倒を見てくれた。徹が小学一年生の時に健一は水の事故で亡くなった。徹は四十数年前の出来事を思い出した。

お盆が終わって夏休みも残りわずかとなったある日。朝から夏の強い日差しが地面を照り付けていた。家の中の風通しを良くしようとして縁側の戸を開けっ放しにするが、部屋の中に貯まった蒸し暑い空気はなかなか外には出て行かない。

ジー、ジー、とアブラゼミの鳴き声が蒸し暑さを倍加させた。

カラン、カラン、カラン、と鉦を鳴らす音が遠くから聞こえてきた。徐々に大きくなってきた鉦の音がアブラゼミの鳴き声を打ち消し、家の中に涼感を運んできた。

「じいちゃん！あの鉦の音。もしかして、氷菓子を売りに来たんじゃない？」

茶の間でテレビを付けながら、うたた寝をしていた徹が祖父に言った。

「そうだな。お前たち、好きなものを買ってきた」

祖父はポケットから小銭入れを取り出して健一に渡した。健一、健二、徹の三人は玄関前の道路に出て、氷菓子を売りに回っている麦わら帽子のおじさんを待った。

カラン、カラン、カラン

カラン、カラン、カラン

発泡スチロール製のクーラーボックスを荷台に積んで、自転車を引く麦わら帽子のおじさんの姿が三人の視界に入った。自転車が家の前で止まった。

おじさんがクーラーボックスの蓋を開けると、棒の付いた箱型のアイス、チュープやボー

ルの形になったアイスなど、色も形も様々な氷菓子が入っていた。

徹と健二はチューブ型とボール型の氷菓子をそれぞれ選んだ。健一は棒の付いた箱型のアイスを二本選んだ。一本は祖父の分だ。健一が代金を払うと、三人は家に戻って火照った体を氷菓子で冷ました。

「午後はずっと暑くなりそうだ。家に居ても暑いから、生駒川に行つて魚捕りでもしないか」健一が二人の弟を誘った。

「魚捕り？何が捕れるの？」健二が健一に尋ねた。

「ウグイだ。いっぱい泳いでいるぞ！」健一が答えた。

「お前たち。魚捕りもいいが、事故には気を付けるんだぞ」

祖父が心配そうな表情を浮かべ孫たちに注意した。

「爺ちゃん、大丈夫だよ。もう何回も行っている場所だから慣れてるよ」

健一が言った。

徹が子供の頃には、まだ学校にプールはなかった。同じ学校に通う子供たちは、夏休みになると、水がきれいな生駒川に出掛けて行つては水遊びや魚捕りをして遊んだ。

午後に入ると一段と暑さが増した。三人は自転車に乗つて家を出た。健二は自分の自転車を漕いで、徹は健一の自転車の荷台に乗せてもらい、生駒川に向かった。

三人が生駒川に着くと、他に子供の姿はなかった。夏休みの宿題に追われているのだろうか。お盆前に来た時は大勢の子供たちが水遊びや魚捕りをしていたのだが、今日は三人の他に誰もいない。

「ここには、ウグイはいないようだ。もう少し下った所に移動しよう」

健一が二人の弟に向かって言った。

「大丈夫？この先は流れが急になっていて、その先は滝になっているよ。兄ちゃん、危ないよ」健二が不安顔をして言った。

「滝」といっても、実際は「堰堤（えんてい）」という、高さが十メートルほどあるコンクリート製の堰のことだった。堰堤は河川を下り落ちる土砂が下流に流出しないよう設置された人工の構造物であるが、上流から流れてきた土砂が堰堤に堰き止められ堆積し、コンクリート製の滝に変わった。

三人はウグイの群れが見られる場所にたどりついた。蟬の鳴き声が周囲の山肌に当たって木霊している。川面を涼風が渡る。三人はサンダルを脱いで素足を川の中に入れた。川の水が火照った体を冷まし、汗を止めた。

川岸から水面を覗くとウグイが群れをなして泳いでいる。水中眼鏡とシュノーケルを付けた健一は、手にヤスを持って下流の方に向かった。徹と健二は浅瀬で、たも網を持ってウグイの群れを追った。

二人は向こう岸に行くために、川面から顔を出した岩を渡った。

「わー！」どぼーん、と川面を叩く音がした。

徹が濡れた岩に足を滑らせて川に転落したのだ。淵に落ちた徹の体が流れていった。

「兄ちゃん、助けて！」

徹の悲鳴と助けを求める声を聞いた健二であったが、急な流れに身を捕られた徹の体を捉えることができなかった。

「健一兄ちゃん、助けて！徹が川に落ちてそっちに流れていくよ！」

健二が大声を上げて健一に助け求めた。徹の体が流れ下る先で川に潜って魚を捕っていた健一が、水中から体を出して、流れてきた徹の体をやつとの思いで掴んだ。徹の体を掴んだ健一は川岸で待機していた健二に徹の体を預けたが、今度はバランスを崩した健一の体が急流に押し流され、やがて川面から姿を消した。

健一兄さん、ほんとうにすまなかったね。

健一の命と引き換えでもらった徹の命。徹は自責の念に駆られながら人生を送ってきた。

ピー

練習の終わりを告げるホイッスルが鳴った。

「はい。今日の練習はこれで終わりにします。練習初日と比べて上手に叩けるようになりました。バチはゆっくり、まっすぐに上から下に降ろすこと。そうすると大きな音が出ます。それでは後片付けをして帰ります」

指導役の井上さんの号令で子供たちはいっせいに動き出した。後片付けを終えた春香が徹のもとに戻った。

「春香、家に帰ろうか」

「うん。お父さん、お月さまが雲の間から出てきたよ」

「そうだね。今晚のお月さまは三日月だね」

満月から五日が経って丸い形が三分の一ほど欠けた三日月になって夜空に浮かんでいた。公園を出た徹は春香の手を握って家路についた。

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドンドン

ドンガ、ドン

今日は最後の練習日。公園には大勢の見物客がいた。太鼓の練習に参加している子供たちの母親や祖父母たちだ。三日前から本番を意識した練習になった。和太鼓二台と樽太鼓四台を使って子供たちが交代で練習している。今まで下駄のような板を叩いて練習していた春香と雄太君は二日前から樽太鼓を叩いている。

ドドンガ、ドン

ドドンガ、ドン

トコトン トコトン

トコトン トコトン

「その調子。いいぞ。今日が最後だからね。気合を入れてがんばって！」

指導役の井上さんの声に熱がこもる。

ピー

練習の終了を告げるホイッスルが鳴った。

集まった子供たちの前で井上さんの最後の講評が始まった。

「練習は今日で全て終了しました。一週間前から始めた練習ですが、笛や鉦のリズムに合わせて上手に叩けるようになりました。お祭りの日には大勢の人がやってきて、皆さんが太鼓を叩く姿を見ているますが、緊張しないで普段どおりに叩いてください。丸一週間、練習が続いたので疲れがたまっていると思います。明日はゆっくり体を休めてください。お祭りは二十四日と二十五日の二日間の日程で行われます。『仁和加』（山車）は、二十四日は午後三時、二十五日は神楽舞が終わった後、午後三時半頃に公園を出ます。囃子方の皆さんは、『仁和加』が出る十五分前に、これから配る法被を着て公園に集合してください。それでは、最後にお祭りの時に着る法被を配ります。青い法被は男の子用です。紅い法被は女の子用です。間違わないように持って帰ってください」



最後の練習を終えた春香が紅い法被と帯を持って徹のもとに戻った。徹と春香は家路についた。

「ただいま」

春香が台所に居る由紀子に帰宅を告げる。

「お帰りなさい。春香、スイカでも食べる。冷蔵庫に入れておいたから冷えているわよ」  
由紀子が銀杏切りに切った西瓜を載せたお盆をクーラーの効いた居間に持って来た。春香は西瓜を食べ終わると、早速、持ち帰った紅い法被を試着した。

「どう、似合うかしら」

赤い法被を着て両腕を横に伸ばした春香が徹と由紀子を前に言った。

「は、は、は」

法被の袖に両腕を通した春香の姿を見て、徹は思わず高笑いした。法被姿の春香が筒袖を着て両腕を伸ばした恰好の奴胤に見えたからだ。小柄な春香には少し大きかったようだ。

「お父さん。何がそんなに可笑しいの」

「だって春香の格好が奴胤に見えたからだよ」

由紀子も貰い笑いした。

「何よ、お父さんって嫌い！」

機嫌を損ねた春香の頬がぶつくりと膨らんできた。今度はお多福のような顔になった。

徹はじつと笑いをこらえた。

徹たち家族が暮らしている住宅団地は最寄り駅の水原駅に近い場所にある。向かいに住む元教員の藤田さんの話によれば、今でこそ住宅地が変わってしまったが、宅地開発が始まった当時の駅周辺は田んぼが広がる田園地帯であった。駅前には農家から集めた米俵を一時保管する農協の倉庫があった。徹は藤田さんの話を聞いて往時の情景を思い浮かべた。稲刈りが終わると、六十キロ入りの米俵が何千俵も農協の倉庫に集められる。米の出荷が始まった。倉庫から放出された米俵はこの駅から貨物列車のコンテナに積み込まれ、大消費地の関東方面に運ばれた。また、水原駅は中学校を卒業したばかりの農家の次男坊や三男坊たちを乗せて、就職先が決まった関東方面に運んだ集団就職の列車が停車した駅でもあった。しかし、往時の名残を伝える痕跡は見当たらない。

藤田さんの話は続く。戦後生まれの第一次ベビーブーム世代が子育て世代となった昭和

四十年代後半に持ち家を求めてこの住宅団地に殺到したという。車が普及していなかった当時、鉄道を使って会社勤めをしていた子育て中の若者は、駅の近くに造成されたこの住宅団地に家を建てたという。小学校の教員をしていた藤田さんもこの住宅団地が売りに出された初期に土地を買って家を建てたそうだ。

徹がこの町内に住んでみて感じたことは、予想以上に進む少子高齢化の現状だ。農村部だけではなく都市部でも少子高齢化が静かに進んでいるようだ。日中、通りを歩いている人はお年寄りがほとんどだ。朝晩の散歩も犬を連れた高齢者が多い。学校の登下校時に数名の小学生や中学生が家の前を通る姿が見える以外に、日中、甲高い声を上げながら外で遊ぶ子供の姿を目にすることは少ない。徹が暮らす町内は世帯数が百二十戸余りあるが、町内には春香と同年の子供は三人しかない。春香が通う小学校も、六年生と二年生以外は一学年一クラスだ。農村地域だけでなく市街地にある小学校も児童数が少しずつ減っているようだ。

徹が卒業した小学校と中学校は三十五年程前に統廃合となり、当時の木造校舎は取り壊され、跡地には校舎があったことを記した石碑が建っている。春香が通う小学校も児童数が減ってくれば、いずれ統合されるかもしれない。徹はこの町内に移り住んで、そんな不安を感じ始めていた。また、空き家が増えているのも気にかかる。毎晩、夜になっても明かりが点灯していない家は空き家だ。近所にはこのような空き家が増えている。

この町に引っ越して来たばかりの頃、「野上さんのお家は、毎日、賑やかでいいですね。羨ましいわ」と、隣に住むおばあさんから言われたことがあった。どうやら家の中で春香が発する声やドタバタと走る音が隣家まで届いたらしい。そのおばあさんは昨年、特養施設に移った。ずーと一人暮らしだったおばあさんの家は空き家になってしまった。近所には管理されないまま放置され、やがて朽ちて廃屋になってしまった空き家も何軒かある。徹の暮らす町内にある住家の二割近くは空き家だ。残り八割の家に住んでいる住民の多くは高齢者だ。

徹の実家がある農村集落では高齢化が更に進んで、六五歳以上の高齢者が半数を超える「限界集落」になった。空き家も多い。空き家のほとんどは管理されず放置されたままだ。空き家はやがては雪の重みで崩壊して廃屋になる。老夫婦二人で住んでいた家が一人暮らしの家になり、一人暮らしの家が空き家になり、やがては朽ちて廃屋になる。住民の高齢化と住家の老朽化。「老いる町」は今や地方に共通する老化現象だ。

二十四日夕刻。徹は祭典委員の仕事をするための身支度をした。紺色の法被と豆絞りの手ぬぐい首に掛けた徹の姿を見た春香が「お父さん、かっこいいよ」と言つて送り出してくれた。

エイサ、エイサ、エイサ

エイサ、エイサ、エイサ

徹が随行する女性灯籠が家の前を通りがかつた。由紀子と春香が玄関先に立つて、徹が随行する灯籠を見守っていた。

「あ、お父さんだ」

春香が徹に声を掛けた。徹は手を上げて春香と由紀子に答えた。

徹は、女性灯籠や男衆が担ぐ大燈籠を見て、町内には、こんなにも大勢の若者が住んでいるのだろうかと思つた。徹の疑問は間もなく解けた。祭り終了後に本部テントの中で、町内会の役員、祭りの役員や祭典委員、それと灯籠の担ぎ手の若者が参加して簡単な慰労会が行われた。テーブルには瓶や缶に入ったビールや一升瓶に入った日本酒、それに町内会の婦人部が作ったトン汁、枝豆にさきいかななどの乾きものが並べられた。

徹はビール瓶の栓を抜いて、灯籠の担ぎ手の若者にビール瓶の口を向けた。

「お疲れさまでした。疲れたでしょう。さ、どうぞ」

「すみません。車を運転して帰るんで、ノンアルコールにしてください」若者は答えた。

「あれ、この町内に住んでいないんですか」徹は若者に尋ねた。

「はい、隣町に住んでいます。私が住んでいる町では、数年前に夏祭りが無くなったので、この町内に住んでいる友達に誘われて、毎年、ここの夏祭りに参加しています」

若者は屈託無い笑顔を浮かべて答えた。

そう言われて灯籠の担ぎ手の飲み物を見ると、ほとんどがノンアルコールビールなどソフトドリンクだった。慰労会が始まって三十分程が経つて若者たちは「これで失礼します」と、言つて三三五五連れ立って帰つて行つた。最後まで慰労会の席に残っていたのは町内会の役員、祭りの関係者、それに灯籠を担いだ町内の若者だけだ。実行委員の中村さんの話では、途中で帰つた若者はみな、町外から参加した助っ人だという。彼らの住む町では神輿や灯籠の担ぎ手の若者が少なくなったため、やむなく夏祭りを廃止したそうだ。行き場を失つた町外に住む祭り好きな若者は町内に住む友人や親戚の誘いを受けて、神輿や灯

籠の担ぎ手として菅原神社の例大祭に参加しているという。徹の実家のある農村集落でも、子供の頃には毎年行われていた秋祭りが廃止されて久しい。

祭り二日目の二十五日は朝から厳しい残暑に見舞われていた。夏祭りに併せて町内会主催のイベントが公園で行われた。徹は春香と由紀子、それに由紀子の甥にあたる小学六年生の英人君と四年生の浩司君を誘ってイベント会場に向かった。公園は親子連れで賑わっていた。金魚すくい、ヨーヨー釣り、スカットボールなどのゲームや綿菓子、ポップコーンなどの食べ物コーナーが設けられていた。金魚すくいやヨーヨー釣りの前では子供たちが並んで順番を待っていた。これらのイベントは主に子供向けに企画されたものだが、大人にも楽しんでもらおうと、無料の参加券が町内の全世帯に配られた。この参加券を持って行けば人数に関係なく誰でも参加できる。参加券には「子供の参加は大歓迎！」と書いてあったので、由紀子は甥にあたる二人の小学生を誘った。四年生の英人君と、六年生の浩司君だ。五人はこの無料チケットを持ってイベント会場の公園に向かった。公園では大勢の親子連れや孫を連れとおばあさんが集まっていた。片隅に置いてあるビニール製のプールに入って「キャー、キャー」と叫び声を上げながら、水を掛け合っている子供たちの姿も見える。

「春香もプールで水遊びをする？」

「はずかしいわ。プールで遊んでいる子はみんなちっちゃい子ばかりじゃないの」

確かに、プールで遊んでいる子供の多くは未就学児だ。小学生も数名いるがいずれも一、二年生の低学年だ。

(去年まではプールに入って、はしゃいでたくせに)

今年から太鼓の叩き方になった春香は少し大人になったのかも知れない、と徹は思った。徹たちはゲームを一通り楽しんだ後、本部テントに入った。本部テントの中ではかき氷が振る舞われていた。

「春香ちゃん、こっち、こっち」男の子が手招きした。

春香の同級生の雄太君だ。雄太君はお母さんと一緒にかき氷を食べていた。

「雄太君、こんにちは。今日も太鼓、頑張ろうね」春香が雄太君に向かって言った。

「もちろんさ。一緒にがんばろうね」

緑色のシロップを掛けたかき氷を食べながら雄太君が答えた。

かき氷のシロップは赤、黄、緑、青の四種類が用意されている。春香、英人君、浩司君の三人はそれぞれ好きなシロップを掛けてもらった。春香は赤、英人君は青、浩司君は黄のシロップを掛けてもらった。三人のかき氷の色を見て、徹は思わず含み笑いした。

「お父さん。どうして、にやにや笑っているの？」春香が徹に尋ねた。

「だって三人のかき氷のシロップが赤、青、黄の三色でしょう。まるで信号機の色みたいじゃないか。春香のかき氷は赤だけど、赤信号の時は横断歩道を渡っちゃいけないよ。みんなが渡ろうと言っても、絶対に渡っちゃ駄目だよ」

黄色のシロップを掛けたかき氷の入ったコップを手にした徹が言った。

ゲラ、ゲラ、ゲラ

ギャグを入れた徹の一言が周囲の笑いを誘った。

「お父さん、黄色信号だって同じよ。黄色信号も赤信号と同じように、止まれの意味よ。

車が停止線に止まらない場合にだけ交差点を通過してもいいのよ。分かっているでしょう」

ふくれっ面をした春香が口を尖らして言った。

黄色信号になるとスピードを上げて交差点を通過しようとする徹の癖を、春香は見抜いていたようだ。

ゲラ、ゲラ、ゲラ

周囲は再び笑いに包まれた。

「野上さん、娘さんに一本やられましたね。こちらで生ビールでもどうですか。実行委員の中村さんが手招きして徹を呼んだ。今日の中村さんはイベントの運営を担当している。

徹は中村さんから紙コップに入った生ビール受け取って喉に注ぎ込んだ。つまみに出された枝豆を食べながら、しばらく中村さんと歓談した。

「野上さんのお子さんはお一人でしたね」

「はい、そうです。今日は娘と妻の甥にあたる小学生の男の子を誘ってイベントに参加しています」

「そうですね。野上さんもこの町内に引っ越してきてから分かったと思いますが、町内に住んでいる子供がだんだんと少なくなりました。結婚して町外に出て行った女の人は、毎年夏祭りの時期になると、子供を連れて里帰りする人が多いんですよ」

「そうだったんですか。お祭りの時期になると子供が増えてくるので不思議に思いましたが、その訳が分かりました」

中村さんから言われて回りを見渡すと、確かに祖父母、娘、孫と思われる三世代の家族

が何組かいる。向かいに住む藤田さん夫婦も隣町に嫁いだ娘さん、それと二人のお孫さんと一緒に金魚すくいにチャレンジしている。中村さんの話は続いた。

「最近、囃子方をやる町内の子供たちが少なくなっていて困っています。灯籠の担ぎ手のように町外から助っ人を呼ぶというわけにはいきませんからね」

「そうですね。私の実家がある農村集落では、秋祭りの神輿を担ぐ若者がいなくなって今は行われていません」

「そうですね。こっちはまだいい方ですね。昨日、春香ちゃんが『仁和加』に乗って太鼓を叩いていましたが、練習の成果がちゃんと出ていましたよ」

「ありがとうございます。昨日は初めての本番だったので緊張して叩いていたようです。今日は昨日よりもうまく叩けると本人は言っていますが…」

「そうですね。春香ちゃんのようにお祭り好きな子供たちがいると助かります」

午後三時頃。徹たち五人は再び公園に向かった。公園には法被を着た囃子方の小中学生が集まっていた。

「お父さん、写真撮って」

紅い法被を着た春香が紅白の布や提灯などで飾られた「仁和加」（山車）の前に立って、両手でVサインを作った。

カシャー

徹のスマホが春香の得意ポーズをとらえた。

公園には「仁和加」を引くために参加した子供とその母親も集まっていた。青い法被を着た男の子や赤やピンク色の法被を着た女の子だ。頭にはねじり鉢巻き、上は法被に、下は白い短パンと白足袋を履いたお祭り衣装に身を固めた女の子もいる。「仁和加」が出立する前に、神楽舞の一行を乗せた軽トラックが公園にやって来来た。高校生らしき若者が篠笛と小太鼓に導かれ、獅子舞と剣舞を披露した。獅子舞が終わると、獅子頭が見物客の頭を食んだ。演舞を見物していた囃子方の子供たちの頭も食まれた。獅子頭を食まれ泣き出した幼子もいた。三時半過ぎ。予定時間を少し遅れて、「仁和加」は二本の手綱に引っ張られてゆつくりと公園を出発した。

ピーシャラ ピーシャラ

ドドンガ、ドン ドドンガ、ドン

トコトン、トコトン  
チンチン、カンカン

囃子方の演奏が始まった。「仁和加」に乗った春香が樽太鼓を叩いている。バチさばきが昨日よりも滑らかにみえる。徹ら四人は「仁和加」の前から出た二本の手綱を握って山車を引っ張っている。

ヨイシヨ、ヨイシヨ、ヨイシヨ

ヨイシヨ、ヨイシヨ、ヨイシヨ

「仁和加」が巡行する沿道では近くに住む人が通りに出て山車を見物している。小さな子供を抱いた母親の姿が見える。孫の手を握ったお年寄りの姿も見える。

『仁和加』を止めてください。ここでちよつと休憩を入れます」

実行委員の佐々木さんが号令を掛けた。参加者に氷菓子が振る舞われた。囃子方の子供たち、仁和加を引く子供たちや大人たち、沿道の見物客にアイスクャンディーが配られた。

徹も一本もらって口に入れた。喉を通過して胃袋に入った氷菓子が熱くなった徹の体を冷ました。

春香たちは二本目を頬張っていた。

「急いで食べると頭が痛くなるぞ」

徹が春香に注意した。

「平気よ。これを食べたなら三本目に挑戦しようかしら」

三本目を貰って来た英人君や浩司君を見て春香が言った。

徹はアイスクャンディーを食べながら少年時代に故郷で過ごした夏休みを思い浮かべた。発泡スチロール製のクーラーボックスを自転車の荷台に積んで氷菓子を売りに来た麦わら帽子のおじさんだ。麦わら帽子のおじさんは、チリン、チリン、チリンと、手に持った鉦を振りながら集落の中を回る。まだ、家々にクーラーが普及していなかった頃で、暑い部屋の中を少しでも涼しくしようと縁側の戸を開けっ放しにするが、途切れ途切れに涼風が入ってくる程度だ。代わりに麦わら帽子のおじさんが鳴らす鉦の音が、風鈴の音色のように聞こえ涼感を誘う。テレビを見ながら、うたた寝をしていた徹は祖母からもらった小銭を持って道路に出た。おじさんにお金を渡して、棒の付いたアイスや凍ったジュースが入ったチューブをもらって口に入れた。まだ冷蔵庫が普及していなかった頃に、氷菓子を食べて酷暑をしのいだ思い出の一シーンだ。

休憩が終わって「仁和加」がゆっくりと動き出した。町内を巡行した山車は一時間ほど

かけて公園に戻ってきた。本部テント前で「仁和加」の帰りを待っていた実行委員長の挨拶が終わった後、祭りに参加した子供たちに、ご褒美のお菓子が配られた。お菓子の入った袋をもらった春香と英人君、浩司君は大喜びだ。

徹には祭典委員としての夜の仕事が待っていた。徹は早めの夕食をとって集合場所の公園に出掛けた。男衆の担ぐ大灯籠、女衆が担ぐ女性灯籠が台座に据えられている。辺りが薄暗くなってきた。灯籠に灯が灯された。蠟燭の炎の揺らぎが灯籠に描かれた武者絵と般若絵を怪しく映し出す。一升瓶が開けられ、日本酒が白い猪口に注がれ、灯籠の担ぎ手など参加者に振る舞われた。男衆のなかには顔を赤らめた若者もいる。

エイサ、エイサ、エイサ  
エイサ、エイサ、エイサ

提灯を持った先導役、男衆と女衆が担ぐ灯籠、祭りの文字が入った大きなうちわを持った者、飲み物を積んだ台車の順で動き出した。蠟燭の火に灯された灯籠が暗くなった町内の小路を巡行する。男衆が担ぐ大灯籠が大通りに出ると、隣の町内会の大灯籠と会遇し、ぶつかり合った。

エイサ、エイサ、エイサ  
エイサ、エイサ、エイサ

押し合いで熱くなった男衆の体がけて柄杓に入った水が浴びせられた。男衆の体の熱りが水を白い蒸気に変えて周囲に立ち昇った。

ヒュー、ダーン  
ヒュー、ダン、ダン、ダン

どうやら瓢湖の湖畔で花火の打ち上げが始まったようだ。大小様々な色と形の花火が夏の夜空を飾った。徹にとつて、花火は子供の頃から見慣れた夏の風物詩だ。今ごろ家では由紀子と春香が二階で花火を見ていることだろうと、徹は思った。

エイサ、エイサ、エイサ  
エイサ、エイサ、エイサ

ぶつかり合いを演じた男衆の灯籠は一路、菅原神社に向かった。徹が随行する女衆の灯籠も神社に向かった。

エイサ、エイサ、エイサ  
御神体に乗せた御神輿が巡幸を終えて神社に戻って来た。いよいよ夏祭りのクライマックス



クスシーンが始まる。巡幸を終えて帰ってきた御神輿から御神体を神社に移す「宮入」だ。御神輿が神社の境内に入るや、御神輿の帰りを待っていた男衆と女衆はスクラムを組み、「宮入」前に御神体に悪霊が紛れ込まないようにと、結界を作った。

エイサ、エイサ、エイサ

エイサ、エイサ、エイサ

掛け声を上げて男衆と女衆は押し合った。御神体の「宮入」が終了したことを告げる神楽の奉納舞が行われ祭りは終わった。徹の腕時計は午前零時を回っていた。

徹たち親子がこの町に引越してきたのは八年前の夏だった。最初の頃は仮住まいの場所と考えていたが、もしかして終の住処になるかもしれない。もうしばらくこの町に住んでみようと徹は思った。(了)